

漢字とその訓の変遷についての一考察

——「豈」を例として——

國 金 海 二

一般に「豈」という語は反語表現に用いられており、それ以外の用法はともすると忘れられがちである。

これについて江戸後期の儒者であり、また『助字詳解』『虚字詳解』などの語法書を著した皆川淇園（一七三四—一八〇七）は、その著

『助字詳解』（卷之三）の「豈」の項において次のように述べている。

サテ、此豈ノ字ヲバ、初学者多クハ何方ニテモ、反語ニナルトキニ使フ文字ノ如クニ思ヘルハ、大ナル僻事ナリ、史記曹相国世家ニ、惠帝恠相国不_レ治_レ事、以為豈_レ少_レ朕_レ与、トイヘルハ、反語トイフ氣味ノ一向ニ付カヌ処ナリ

この淇園の引いた文は「孝惠帝は相国が政事を執らないのを怪しんで『わたしを年少と馬鹿にしているのか。』と思つた。」という意で、「豈」は反語として用いられているのではなく、疑問または推量として用いられているようである。

このような反語以外の用い方があることは「初学者」以外には当然あるべき知識であつたかもしれないが「アニ……ムヤ」と読みなれ、反語として解釈する文がほとんどのなかでは見落されがちであつたに相違ない。

では「豈」は漢籍においてはどのような意味をもつ語として用いられているのか、そしてわが国ではどのような意味をもつ語として理解されてきたかを主に江戸時代の語法書を中心に考察し、また、この語

が淇園の言うごとく反語のみでなく、疑問・推量などの語としても用いられていた『日本書紀』『万葉集』などについても併せ考えてみたいというのが小論の目的である。

(一) 漢籍における「豈」について

一、反語として

(ア)臣以田单如耳為大過也。豈独田单如耳為大過哉。(戦国策、秦)

臣は田单・如耳の策を、大きな誤りを犯していると考えています。(しかし)ただ田单・如耳の策だけを大きな誤りを犯していると考えておりましようや。

(イ)今天降衷於呉、斉師受服。孤豈敢自多。(国語、呉語) 今、天は呉に祝福を下して、斉は降伏しました。わたしはどうして自慢したりしましうか。

(ウ)孤特独立、而欲常在。豈不哀哉。(史記、項羽本紀) たった一人の孤立した状態にならうとしているのに、いつまでも健在であろうとしている。哀しいことではありませんか。

反語表現とは、話し手がある結論がわかっているながら、疑問の形式で一応相手に問いかけたり、自問自答したりする形式をとる表現であ

り、これらが代表的な例文と考えられる。すなわち、(ア)は、「豈」が「哉」という語氣詞と呼応して反語の文型を作っている。(イ)は、「豈」単独であり、(ウ)は、下に「不」という否定の語をともなっている反語の文型である。

なお、(ウ)と同じ文型で次のようなものがある。

(エ)景春日、公孫衍・張儀、豈不誠大丈夫哉。(孟子、滕文公下)

景春が言った。「公孫衍や張儀はほんとにすぐれた男ではないか。」

これらが詠嘆ともとれるものであることは、反語表現が人間の喜怒哀楽の感情をそのまま表現する形式の文でないことに由来するからであらう。

二、疑問・推量として

(オ)子嘗宣言、代我相秦。豈有此乎。(戦国策、秦)

あなたはかつて「わたしに代わって秦の宰相になるだろう。」と触れ回っていたそうだが、そのようなことがあったのか。

(カ)然則將軍之仇報而燕見陵之愧除矣。將軍豈有意乎。(史記、刺客列伝)

このようにすれば將軍の仇は討て、燕のあなどられた恥辱をそぐこともできます。將軍、このおつもりはありませんか。

(キ)諸葛孔明者臥竜也。將軍豈願見之乎。(三国志、蜀書、諸葛亮伝)

諸葛孔明は臥竜というべき人物です。將軍、会ってみたいとお思いませんか。

(ク)又聞、項羽亦重瞳子。羽豈其苗裔邪。(史記、項羽本紀)

また項羽も二つの瞳であったということだから、項羽はことによるとその子孫にあたるのだろうか。

(ケ)楚之先豈有天祿哉。在周為文王師、封楚。

楚の国王の祖先には天から賜った恩恵でもあったのだろうか。周の時代には文王の師となったおかげで、楚に封ぜられた。

(コ)太后豈以為臣有愛不相魏其。(史記、魏其伝)

太后さまは、わたしが魏其を宰相にしないのは物おしみをしているとお思いになっていらつしやるのでしょうか。

右の例文で(オ)(キ)は疑問、(ク)(ケ)は推量表現と考えられる。ともに反語表現と同じ形をとっており、「乎」「哉」などの語氣詞の有無は関係ない。

また、疑問と推量との判別が困難であることが多いのは、推量が不確実な判断や想像上の事実について述べるものであり、いつも疑問をともなっているからであらう。

三、願望として

(カ)君豈有斗升之水而活我哉。(莊子、外物)

どうか少しの水でもいいですからもって来てわたしを助けて下さい。

(キ)天王豈辱裁之。亦征諸侯之礼也。(国語、呉語)

大王、どうか辱くも裁定されよ。これが天子の諸侯を征伐なさる礼でもございます。

これらが願望表現の「豈」と思われるものであるが例は少ない。(これについては次の「強意」の項を参照)

四、強意として

(ス)夫人生手足堅強、耳目聰明聖智。豈非士之所願与。(戦国策、秦)

さて、人と生まれた以上、手足は強健、耳目は聡明、知恵はすぐ

れている。これこそ士の願う所ではありませんか。

(七) 千金之家比一都之君、巨万者乃与王者同楽。豈所謂素封者邪、非也。(史記、貨殖列伝)

千金の富豪は一城の大名と肩をならべ、巨万の富をもつ者は王者と楽しみを同じくする。これこそが前に言った「素封」というものではないか、そうではあるまいか。

これらの「豈」は強意の語とみられ、これと同じように考えられるものに願望の「豈」と例文(エ)にあげた詠嘆の「豈」がある。前者について述べれば、強意の「豈」を文中にふくませることによって、その意図する動作や状態を強く望む意味を帯びさせることが可能であるからである。たとえば、例文(サ)において、強意の「豈」を文中におくことによつて「斗升之水」を強く要求していることは前後の関係から明白であろう。後者の詠嘆表現は、話し手の心中に充滿する強い感情のほとばしり出を本質とする言語表現であるから、強意の語が含まれることは当然ともいえよう。

以上「豈」をふくむ文について考察してきたが、疑問・推量・反語を、また強意・願望・詠嘆をそれぞれ一連のものとして——「豈」を二分類して——考えるときに次のように言えよう。

前者は疑問の文型となつているか、前後の関係によつて疑問表現となる条件をそなえているかである。そして「豈」はその三つのうちのどれかの意味をふくむ語であり、どれであるかは前後の文意によらなくてはならない。

後者は文中においてすべて強調の意を有し、強意の語「其」と同じように用いられているようである。これは後記する「豈」についての『経伝釈詞』『助字弁略』の注釈の外にも『集韻』には、「其、辞也、豈也」とあり、『助字弁略』にも『史記』叔孫通伝の「呂后与陛下

攻苦食啖、其可背哉」などを例にあげ「此其字、並是豈辞、其豈音相近、故通也」と述べていることからわかる。そして、「其」「豈」などの語は本来、強意・願望・詠嘆などの別はなく一種の強調表現のなかに用いられた語ではなかつたろうか。

では、中国の韻書・字書などではこの「豈」をどのように解説しているかをみると、

『広韻』 豈、安也焉也曾也

『増韻』 字彙 豈、非然之辞

などが代表的なもので、ほかに願望の意として設けているものに、

『説文繫伝』 豈、一曰欲也

『説文通訓定声』 豈、仮借又為覲

があり、また次の二書が例文(シ)などを例として次のように述べている。

『経伝釈詞』 豈、猶「其」也

『助字弁略』 此豈字、与其通、音相近也

さらに現代の『辞海』をみると以下のごとくである。

豈① 犹言宁。难道。用疑问或反诘句。如…岂有此理。《国策、秦策

三》子常直言代我相秦、岂有此乎？② 犹言其。用于祈使句。

《国语、吴语》大王岂辱哉之？

(二) 江戸時代の語法書における「豈」について

複雑な人間心理とも関係する反語表現に主として用いられる「豈」という語であるが、江戸時代の語法書ではどのように解説したり、日本語訳をしたりしているかをみたい。

◎『広益助語辞』(三好似山、一六九四年刊)

わが国最初の語法書ともいふべき本書は、『助語辞』という名はふくんでいるが元の盧以緯のその解説書ではない（『助語辞』の解説は紹介している）。また漢文で記されているので日本語訳はない。これには「広韻」「字彙」の解説をのせる外に次のように記している。

助語辞曰、反説以見意、有如俗語那上裏是之意、或有如莫字之意……○小補韻會也

また『文選』鸚鵡賦「豈言語以階乱将不察以致危」における呂延済の注「豈、自発問也」をひいている。

この書によって「豈」が反語のみに用いられる語ではなく、否定の意を有し、願望、自問のことばとしても用いられている語であることを知ることができる。

◎『助語辞諺解大成』（毛利貞齋、一七〇八年刊）

本書は『助語辞』を俗語（口語）で解説したものであるが、その「豈」の項では解説の外に次のように述べている。

豈ノ字ヲ、アニト訓ズルコト一ツナレドモ時トシテ、何ゾシモ左様ナルコト在ンヤノ意ニ用ヒ、又何ゾシモナカランヤノ意ニ用ルコトモ在リ。初学書ニ対シ、上下ノ語ヲ能ク見合セテ其義ヲ不誤

これによると、「豈」をふくむ文にも反語となる場合と、否とがあり、それを判別するには文意によらねばならないと初学者に対する注意を記している。

◎『語助訳辞』（松井河楽、一七一九年刊）

豈ノ字ハ反説シテ以テ意ヲアラハス字ナリ、反説トハ豈サヤウニアラシヤ、サヤウニハナキゾト云フ事ナリ……或ハ莫ノ字ノ如キ意モアリ、ソノ時ハ豈サヤウニスベキヤ、サヤウニスル事ナカレノ意ナリ

と述べ、また、「豈ノ字ヲ問フ辞ニモ用ユルナリ」と、『広益助語辞』が採録していた『文選』を例にひく「豈、自発問也」の外にやはり

『文選』七発の「豈有是乎」における李善の注「豈有之乎、設疑問也」を採っている。さらに「非然ノ辞ニテ、アニサアランヤ、ソウデハナシト云フ詞ナリ」と記している。

本書が「豈」のいくつかの用法について「サヤウニハナキゾ」「ソウデハナシ」などと、はじめてわが国の俗語に訳したものであると思われる。

◎『訓訳示蒙』（荻生徂徠、一七三八年刊）

豈字二義アリ、一ハイカサマト訳ス、一ハナニシニト訳ス、イカサマノ時ハ下ヲカトトムル、ナニシニノ時ハ下ヲヤトトムル、豈是乎、イカサマナリ、豈是乎、ナニシニナリ、其文勢ニ従フヘシ、畢竟シテ二義共ニ不知ト行ス

「豈」をふくむ文が全く同じであつても差異のあることを述べている。この「文勢」とは本書巻一に「訳文ニ字義文理句法文勢ト云コトアリ」に記すところの意であろう。そこには「句法トハ一句ノ上ニ巧拙ヲ論ズルコトナリ、文勢ハ全体ノ文勢ナリ……句法文勢ハ唐人詞ニナリテノ上ニテ文ノ上手下手ヘカ、ルコトナリ……」とある。

◎『助字詳解』（皆川淇園、一八一三年刊）

本書のことばについての解説の方法は、言語行動を成立させる要因である話し手、聞き手、内容、場面を考察するという科学性を有しており、反語のことばとしての「豈」の説明も次のように現代性をおびている。

此ハ向フノ聞人ノ心ニ、其処ノヤフスヲ見クラベテ、所存ヲ付ケテ言フニ、動カヌ処ヲ立テ、言フニ用ユ

そして先に述べたように「豈」は反語のみに用いられることばでないことを言っているが俗語訳はない。

◎『太史公助字法』（一七六〇年刊）

◎『左伝助字法』（一七六九年刊）

◎『詩經助字法』(一七八三年刊)

右は異なる三つの著作について、その助字を淇園がおのおの別個に解説した当時としては画期的な著述である。これらにはそれぞれ「用豈法」という項目があり、俗語訳をつけている。

『太史公助字法』 此カフアルハト云意持ナリ

『左伝助字法』 此カフアルモノガト云フ意ナリ

『詩經助字法』 見在ニカクアルハ カクアルカラハト云フコ、ロ

ナリ

右三書における「豈」がこの俗語訳で総括できるとは思えないが、注目すべきことばの解釈といえよう。

◎『助字訳通』(岡白駒、一七六二年序)

「豈ノ字ニ二義アリ」とし、まず反語の例をあげて「何ノ字ト同意」と述べ、次に「其一ハ、ヲシハカル辞ナリ」と『史記』『漢書』の例を示して次のように解説している。

此ノ豈ノ字皆ヲシカル辞ナリ、故ニ豈ヲ恐ト訓ズ、恐懼ノ恐ニ非ズ、恐ノ字ニ疑也、億度也ノ訓義有リ、豈謂_レ是邪ハ恐_レ謂_レ是邪ト同シ、是レ疑ヒノ義ト億度ノ義ヲ以テ、ヲシハカル辞トナルナリ……胡三省ガ通鑑ノ注ニ豈ヲ恐也ト訓ズ

ここでは「豈」は疑問というよりも推量のことば「おそらくは」として解説されている。

◎『文語解』(積大典、一七七二年刊)

この書は凡例において「一字ニ一訳アリテ相当ルハ論ナシ、或ハ一訳多字ニアタル、或ハ一字ニ多訳アリ、或ハ倭語ニアタラヌ字アリ、字ニアタラヌ倭語アリ……」また「嘗ニカツテノ訳、肯ニアエテノ訳、乃ニスナハチノ訳、コノ類ソノ義ニ当ヌコト多レドモ、古来ノ熟語トナリ、ソレニテ解シ来リ、又別ニ的当セル訳語モナケレバ今更ニ改カタクシ、旧訳アタラズシテ別ニヨクアタル訳語アルハコレヲ改ム……」

などと述べているように、従来の訓み方にこだわらずに、適当な訳語があれば新しい訓み方をとり入れている特異な語法書であるが、「豈」については旧来の「あに」のみである。そしていくつかの例をあげて「問辞ナリ」と、また「コレ疑辞トナシテ、是ナルベシト云意ナリ」としている。

また反語としての解説には、次のように『万葉集』の歌を引用している。

万葉ノ歌ニ、アタヒナキ、タカラトイフトモ、ヒトツギノ、ニゴレルサケニ、アニマサラメヤ、此アニノ出処ナリ、何ノ義ヨリ婉ニシテ深シ、古今ノ文ニ多アリテ引証スルニ及バズ

これからわかることは「豈」を反語として理解することは引証するに及ばないほど普遍しており、新訓を考える必要はなかったということである。これは反語として用いられている「将・其・可・詎(巨)・幾・寧・庸」などという語にも「あに」という訓み方を当てていることから推測できる。また本書においてさえ「問辞」「疑辞」に用いるときにも「なに」などとは読まずに「あに」と読まなければならないことに「豈」という語と、その読み方の結びつきの強さが感じられる。

◎『助辞鵠』(河北景楨、一七八六年刊)

字書・韻書などの解説をのせた後に次のように述べている。

豈山之性_ヲ哉、豈其_レ可_レ得乎ノ類ハ、何トテサアランヤト云フコトバニテコハツヨシ、又豈謂_レ是耶、豈有_レ此乎ノ類ハ億度ノ詞ニテ通鑑胡註ニ恐也トアルヨシ白駒云ヘリ、此タ_ヲ輕用ニテ上ノ義ト異ナルニ非ラス、アニコレナランヤコレニテモアラント婉ニ云タルユエ恐ラクノ義トナル也

ここでは「豈」の輕用について解説している。すなわち、白駒の著作を引きながらも「豈」には二義はなく、それを重用することによつ

て反語となり、軽用することによって疑問・推量になるといのである。

また、これに続けて『日本書紀』『続日本紀』中の「豈」の用い方はこの軽用したものと同じであると次のように記している。

倭語ニテモ日本紀ニ磐之姫命歌ニカクミヤタリハアニヨクモアラズ、
続日本紀宣命ニ豈障ルコトハアラジト念テナモノ豈コレニ同シ

○『助語審象』（三宅橘園、一八一七年刊）

皆川淇園に師事した著者の解説方法は、簡明ではあるが師の影響を受けているようである。

豈^キ イヤイヤト訳ス 豈者檢詰以反覆^{スル}之^ラ之辭

豈ハカフデアルト云テモドフデカフデアアルマイト云意ナリ、靚觀シテ其^キ覺ヲ伺ヒ指ス意味ナリ、豈ハイツニテモ相手ヲトリテ論シ詰ル辭ナリ

この解説に続けて、反語および疑問・推量の例をあげている。一例を示す。

豈可^レ得乎 可^レ得ト云入乎字ノレヲ語ルナリ

○『操觚字訣』（伊藤東涯・東所、一八七九年刊）

東涯（一六八〇—一七三六）の未定稿の遺稿を三男東所（一七三〇—一八〇四）が補筆編纂して刊行したもの。刊行は遅いが江戸時代中期の語の解釈をみることができる。「豈」については補遺の「呼応」に「豈——乎」「豈——也」などの例文をあげて次のように述べている。

豈ハ、語辭ノトキ、安也焉也會也、又非然之辭ト註ス、「ナニシニ」「ナンノ」「ナンゾ」ト云意、別意如オナキコト也、非^レ然トイヘバ、ヲ、カタト云コト也

以上、江戸時代の主な助字に関する語法書を考察してきたが、次の

ようなことが判明する。

(一)、反語のみでなく、疑問・推量といった意があることを、ほとんど全ての著作に記している。

これは当然のことであるが、毛利貞斎、皆川淇園などが特に注意していることは、反語としての用い方がいちじるしく多く、疑問・推量などの用い方が無視されがちになっていた状態を表すものである。そしてこれは淇園の言ったごとく初学者はもろん全てに必要な注意事項であつたに違いない。

(二)、「豈」は「あに」としか読まれていない。これは和文での「あに」は平安時代以後は反語にのみ使用されているので、「豈」あに^{注1}反語」という固定的な観念ができあがり、他の読み方——同字多訓より発生する読み方——がなかったためである。

他の語では、例えば「何」は『文語解』では、「ナンゾ・ナニ・イツレ・イツクニ・イカニ・イクバク」などと読み、『助辞訳通』では「ナンゾ・ナニ・イツレ」などと読んでおり、疑問・反語を読み方からも判別できるような場合もある。

(三)、反語か否かの判断は、その文型からではなく「文勢ニ従フ」か「上下ノ語ヲ能ク見合セ」るほかはないとしている。

これは反語表現というものが、疑問・推量という判断保留と断定の間にある話し手の心理的なゆれをそのなかにこめている表現方法なので判別ははなはだ困難なのであり、初学者だけの問題ではなかったと考えられる。

(四)、反語としての「豈」についての解釈は特に必要なかった。

『文語解』の項で述べた通りであるが、それ以外の使用法についての知識は充分でなかった。

(五)、願望の意があるとしたものは一書、強意の「其」にみなしたものはない。

これは前者は特異な例であり、後者は「豈」と「其」との音が近いことから通用していたのではないかという発想もなかったからと考えられる。

(六) 契沖および国学四大家などをはじめとするわが国古典・古語に対する研究の影響によるのであろうか、江戸時代後期のものには『日本書紀』『万葉集』などを参考にとり入れている。(これについては後述)

(三) 奈良・平安時代の「豈」について

では、わが国においては一般に「豈」という語を反語表現にのみ用いられる語として理解していたかという点、古くは決してそうではない。少くとも漢文訓読が固定化せず、漢文を翻訳という形で取意していた奈良時代末ぐらまでは、「豈」という語は反語以外の表現にも用いたことは『日本書紀』などによってわかる(前記の『助辞鶴』の項参照)。また、谷川士清『和訓栞』へあにの項参照)。

もちろんこの時代でも次にあげるように反語表現に用いることは多い。

於四方求之、豈有比我力者乎。(日本書紀、卷六)

四方をさがしても、わたしの力におよぶ者があろうか。

無 宝跡言十方 一坏乃 濁酒亦 豈益目八方 (万葉集、卷三)

無き宝といふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも

しかし次のような用例もある。

(ア) 底下豈無国歟。(日本書紀、卷一)

下の方にたぶん国があるだろう。

(イ) 天孫豈見之乎。(日本書紀、卷二)

天孫、ごらんになりましたか。

(ウ) 天孫豈欲還故郷歟。(日本書紀、卷二)

天孫、もしかしたら故郷にお帰りになりたいのではありませんか。

(エ) 那菟務始能 警務始能虚吕望 赴多幣耆氏 介区瀨夜僕利破 阿珥

予区望阿羅儒 (日本書紀、卷十一)

夏蚕の蚕の衣二重著て困み宿りは豈良くもあらず

(オ) 政行^テ豈障^ル物^ガ不在。(続日本紀、卷二十五)

政を行ふに豈障るべき物にはあらず。

(カ) 相雜^テ供奉^ス豈障^ル事^モ不在^ニ念^テ矣。(続日本紀、卷二十六)

相雜りて供へ奉るに豈障る事はあらずと念ほしてなも。

(キ) 八百日往 浜之沙毛 吾恋一 豈不益歟 奥嶋守 (万葉集、卷四)

八百日行く浜の沙もわが恋にあに益らじか沖つ島守

右の六例のうち(イ)(ウ)は、前後の関係からみて疑問または推量のこ

とばとして「豈」を用いているに違いない。特に(ウ)の「豈」には、兼

方本・兼夏本の古訓には「モシ」とあることに注意したい。

また(エ)(カ)は、あとに打消の語をともなつて「おそらく」または

「決して」の意であるが、「おそらく」の意に解すれば推量、「決して」

の意に解すれば強意の「豈」として用いたと推測できる。

このように奈良時代までは反語・疑問・推量・強意などに用いられ

ていた「豈」に漢籍中に反語としての用例が多いことからか、「豈」

反語」という固定観念がいつかできあがってきたと思われる。これが

いつ頃かという想定は困難であるが、一つの試みとして平安時代を代

表する二つの詩文集『本朝文粹』(弘仁年間へ八一〇—八二四)から

長元年間へ一〇二八―一〇三七)までの詩文集)『本朝統文粹』(寛仁年間へ一〇一七―一〇二二)から保延年間へ一三五一―一四二)までの詩文集)を調査すると次のようなことがわかる。

すなわち前者における「豈」の使用例一〇余のうち反語以外に用いていると考えられるものは後記する一例のみであり、後者にはその例をみないようである。従つてこの二詩文集をみるかぎりでは「豈」反語」という意識が生まれてきたのは平安時代中期ごろからではなからうかという推測ができる。

豈死生道殊、情状俄変、将古今年久、神意遂訛(卷三、三善清行、立神祠)

死生道を異にして情状がにわかに変化したのか、または古今年久しくなつて神意もついに誤つたのか。(これは先に記した『文選』鸚鵡賦と全く同じ形をとつており、「将」は選択疑問の語として『本朝文粹』にも用例がある)。

そしてこの頃よりこの語についての理解の混乱がおこりはじめたと考えられる。

ちなみにわが国で古く作られた辞書では「豈」は、どのように解釈されているかをみたい(音に関する部分を除く)。

『世尊寺本字鏡』(院政時代の成立といわれる)

ヤスシ アニ 不必之辞也 作凱楽 一曰欲也 冀也 其也

『類聚名義抄』(観智院本、十二世紀ごろ成立か)

山ノフモト アニ ヤスシ

『字鏡集』(寛元本、一二四五年以前に成立)

ヤマノフモト イカン ヤスシ ネカフ アニ モトモ 不必之辞也 作凱楽 一曰欲也 冀也 其也

『倭玉篇』(室町時代初期に成立)

(上巻)アニ ヤ ナンソ イツクンソ
(下巻)ヤスシ イツクンソ タノシム アニ カツテ
この四書から次のことがわかる。

平安時代末期および鎌倉時代に成立した二書のうちには、反語としての「アニ」の外に願望(欲・冀)と強意(其)の語としてもあつたものもあり、特に『字鏡集』には疑問(イカン)の意のあることも入れている。

室町時代の『倭玉篇』になると、反語としての「アニ」に「ヤ」を呼応させており、そのよみかたも「ナンソ・イツクンソ」と増加しているが、願望・強意・疑問としての解釈はなくなっている。

このことからこの語の疑問・強意・疑問としての意味が時代をくだるにつれて辞書にも記載されなくなっていくことが明らかになる。

なお、室町時代中期の『温故知新書』『塵芥』や同時代に成立したといわれ後に盛行した『節用集』などの国語辞書の「豈」の語には「アニ」と傍訓が付されているのみである。この「アニ」は『温故知新書』には「安・焉」との注があることから反語の語として載せたと考えられる。このように日常使用される『節用集』に反語としての意味しかのらないことにより、ますますそれ以外の使用法は忘れられたのであろう。

(四) むすび

わが国において「豈」という語が、どのように理解されてきたか(どのような意味をもつ語として訓まれてきたか)をみることによつてむすびとしたい。

漢籍においては少くとも疑問・推量・反語および強意(願望・詠嘆)という四つの意味をもつ語としての「豈」がわが国に入ってくる

と「あに」とよまれ、やはり四つの意味をもつものとして理解されていたことは『日本書紀』などによって判明する。

しかしこの語が漢籍では反語に使用されることが多いことから「豈」は「反語」という理解になり、疑問・推量などという用い方はほとんどかえりみられなくなった。これはわが国人の漢文にもその使用例がみられなくなってきたことから平安時代中期の頃よりだと推定することもできよう。

そして「豈(あに)」にいろいろの意味があると理解していた時代には全く考えられないことであるが、「豈(あに)」が反語としてしか理解されなくなり、しかも他の意味として用いられている場合にも読み方だけは「あに」と固定化されたことによって誤解がおこりはじめたのもこの頃からではなからうか。

本来有している種々の意味のうち反語との結びつきが強くなるにつれて、それ以外の用い方への理解が不充分になるのは当然のことであり、少くとも江戸時代にはいると一般には疑問・推量などとしての意味は忘れられ語法書によって注意を喚起する必要がある語となったのである。

一方、語法書には疑問・推量・反語という一連の用い方以外、強意(願望・詠嘆)についての解説が全くなされていない(『広益助語辞』も中国の韻書をひくのみである)。この原因は前述の通りであるが、他に反語のなかに詠嘆はもちろん強意も含ませ「豈」をすべて疑問・推量・反語という一連のものとしてみていたとも考えられる。

以上「豈」という語の訓み(解釈)の変遷についてみると、いくつかの意味をもつ語として、訓読のはじまり頃までは当時の口語とあまり違いのないことばで自由に訓まれていたにちがいない。しかしその固定化により、ことばの変遷についてゆけず、訓読法では正しく取意

することのできないのもでてきたのである。

これは訓読という方法で漢籍を理解するにはさげがはいことであるが注意すべき一つの問題である。

〈注〉

(1) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』に「例へば「アニ」は、上代では、否定で結ぶ場合と反語で結ぶ場合とがあつたが、平安時代にはすべて反語で結ぶ場合ばかりで、しかもそれはすべて訓読の例であり……」とある。

(2) 後述する(三)の(五)「那菟務始能……阿瑯子区良阿羅儒」の阿瑯(豈)について、契沖はその著『厚顔抄』に「豈能不有ナリ、二人ヲ並へ置給ハム事ハ、アニヨカラムヤ、ヨクモアラヌ事ナリトナリ、此阿瑯ノ詞モ、今ニハ叶ヒカタキ欵……」と述べている。

(3) 日本古典文学大系『日本書紀』上、の注に「モシは兼方本・兼夏本の古訓。」とあり、『和訓栞』「あに」の項に同じ例文をひいて「モシ」と訓んでいる。

〈主な使用テキスト〉

『史記』 会注考証本

『戦国策』『国語』など 四部叢刊本

『日本書紀』『万葉集』 古典文学大系(岩波)本

江戸時代の語法書 『漢語文典叢書』(汲古書院)、『勉誠社文庫』(勉誠社)所載のもの